

キリスト教は 仏教から何を学べるか

ヤン・ヴァン ブラフト
Jan VAN BRAGT

私はこのシンポジウムへのオリエンテーションを頼まれたブラフトです。時間があまりないこともあって、ごく簡単に「私達がこの三日間の間に何をしようと思っているか」について、しばらくの間考察していこうと思います。

まずはじめに、今回は第十回南山シンポジウムになりますが、皆様御承知のように、「南山シンポジウム」というものは本来、キリスト教と他宗教との対話の会議として発想されたわけですが、今回は少し違った性格のものになると言わざるをえないでしょう。というのは、表題からしますと、今回は明らかにキリスト教内の問題がシンポジウムのテーマになっているわけです。しかし、そうと言っても、諸宗教対話の領域から離れていくとはけっして言えないと思います。

そのこと自体は、諸宗教対話の重大な契機であるということは、誰も否定できないでしょう。自分の宗教や霊性のために、他宗教から学ぼうとして、その宗教の優れたところを自分自身の宗教の中にも活かそうとするような精神をもって、初めて深いレベルで他宗教を理解することが出来るとは言えないでしょうか。それから、今回のテーマが、言うまでもなく、諸宗教対話——具体的に言えば、少数のキリスト教徒の、仏教との出会い——にその起源をもち、そこから生じたものです。

しかも、諸宗教対話の時代の一つの特徴は、「一宗教内の問題」——ただ一つの宗教のみに関わる問い——は、もはや存在しなくなったところにあるとも言え

ます。一つの宗教において問題になっているもののほとんどは、他の幾つか(またはすべて)の宗教にとっても問題であるわけです。例えば、非神話化というものがいい実例になるかもしれませんが、このシンポジウムの中でも、その現象の印として、第三セッションのテーマは逆に、「仏教はキリスト教から何を学ぶべきか」ということになっています。「人前で汚れものを洗わない」ということは昔から伝えられて来た常識でしょうが、聖公会のある神学者は次のような意味の発言をしました。「対話の精神の一面は、他宗教の目や耳の前で自分の宗教が面している問題と取り組むことだ」と。その言葉に付け加えたいのですけれども、それは、他宗教の人々の前ばかりではなく、その問題の解決に他宗教の人々の助力を期待するということです。

その精神に則して、このシンポジウムには四名の仏教徒の学者がパネリストとして招待され、参加して下さっています。さて、「仏教に学んで神学する」という営みの意義、動機などについて少し考えていきたいと思います。

シンポジウムの意義と狙い

まず、誤解の余地が残らないように、このシンポジウムの主催者である南山宗教文化研究所が、この会議をもって何を狙っているかということに注目しましょう。

シンポジウムの表題は一応、広く「仏教に学べる」ということになっていますけれども、主催者は宗教の多くの分野の中では、別に「行」とか「道」のことで

はなく、例えば、禅仏教から学ぶキリスト教の瞑想とか、浄土教の「念仏」に学ぶキリスト教の「イエスの祈り」のようなものではなくて、むしろ「教」(教え)の分野を考えたら違いありません。ですから、シンポジウムの表題を「キリスト教の神学は仏教の教えと論理から何を学べるか」というふうに読みなおしてもよいと思います。

というのは、皆様もそうであると思いますが、南山研究所の所員は読書を通じて、しかしそれよりも仏教との対話の場で、仏教の影響を明らかに受けて、仏教の根本概念を取り入れて出来た神学の様々な断片に出会って、「それは面白い」ばかりではなく、それは非常に重大な試みではないかと感じてきました。しかしながら、こういう試みが日本の神学界においてあまり注目されないで、日本におけるキリスト教の神学の主流に対してほとんど影響を及ぼしていない感じはします。しかも、この試みが一見ばらばらのもので、あまり統一を見せていないような印象を残すことも否定しがたいと思われます。

それで、日本において存在するそういう傾向のものを、一度まとめていっしょに眺める必要があるのではないかというアイディアが生まれました。それは、もちろん、それらすべての総合を作ろうという意味ではなく(その時期はまだ来ていないと思われます)、むしろいっぺん棚卸しして財産目録を作ってみたらどうかというぐらいでしょう。そうすることによって分かってくるはずのことは、まず、そういう方向のものはどれくらい、

何と何が、あるのか、それから、それらを少し整理して、その中に共通の説や理論を見極める可能性がどれくらいあるのかということでしょう。

そういう検討を通じて、主として次の点に関してバランスのとれた判断に到達できることも期待されます。すなわち、

1. 今まで出来たこの理論の中に、すでに「所得」（確かな結果）と言えるものが含まれているのか、
2. この理論が、仏教の理論に大いに依存しながら、キリスト教のメッセージに本当に忠実であるのか、
3. この神学的傾向にどれくらい将来性があるのか、

ということです。その質問に対する返事によって、我々の、この神学に対する態度が決められるはずです。もしその返事が positive であれば、我々——又は、日本の神学界そのもの——が、今までの否定的あるいは無関心の態度を止めて、その神学の pioneers の遺産を大事にして、彼らの足跡を踏まえて進むように勤めるべきだという結論になるでしょう。

次いでに言いますが、外国人の神学者にも、そういう判断、そして場合によって、この「仏教に学んだ神学し方」に参加するチャンスを与えるつもりで、このシンポジウムの記録を英訳して、アメリカの出版社で発行するという計画を、南山宗教文化研究所が立てているそうです。

この神学の動機づけ

シンポジウムの主催者の狙いを確かめてから、次に、仏教の理論・論理を取り

入れて神学する営みそのものに注目しましょう。この神学の仕方は、その主唱者にとってどういう意義を持っているのか、そういうふうに神学する動機はどこにあるのでしょうか。そういう営みは exciting な知的冒険であるとは思われますが、彼らの書いたテキストからしますと、この思想家たちがおもに自分自身や日本におけるキリスト教徒の実存的ニーズに促されて、キリスト教的信仰に基づいた動機に動かされてきたということが明らかであると思います。

一つだけの証言を挙げますと、例えば本多正昭氏は次のように書いています。

キリスト教的真理を仏教的論理によって再表現せんとする神学的努力は、今日〔省略〕日本のキリスト教学徒にとって一つ避け難い摂理的課題ではないか。¹

この神学者の動機づけをもう少し分析的に見つめてみますと、主として次の三つが区別できるような気が致します。一つ、日本人のキリスト者にとってもっとも実存的なもので、遠藤周作、井上洋二などの文学からも生き生きとして現れるものですが、つまりキリスト教が身につけてきた西洋的知的衣が東洋人・日本人としての自分に合わないと感じるから、自分の信仰のより日本的地盤を見つけたいという動機なのです。それを土着の動機と名付けましょう。この場合において、仏教国日本のキリスト者の目には仏教の宗教的論理が第一の可能性に見られてきても無理ではないと思われます。次に、対話的動機ともいうべき動機があります。すなわち、自分がキリスト者とし

てそれに囲まれて生きている仏教への神学的通路・橋渡しを作ろうという願望です。

しかし、その思想家たちの論文からはもう一つ大事な動機が伺えます。それは、東洋人がそれに特別に敏感と思われるものの、それ自体として世界的キリスト教界の様々なところに見当たるような衝動です。それを少しスローガンぎみに言いますと、キリスト教をギリシア的囚われから開放しようという願望です。というのは、地上の世俗的存在を基礎付けようとして出来たギリシア哲学の論理が、宗教的事実、特にセム族的考え方にそのルーツを持つキリスト教を表現するのにふさわしくないという自覚とともに、そのギリシア的範疇や論理をもって表現された神学（とそれによって形作られた「信仰と理性」の対立）に対する不満に基づいた動機なのです。

そういう全キリスト教的現状の中では、日本キリスト者の思想家たちの特徴は、彼らがギリシア的なものの代わりに、仏教のより宗教的な範疇や論理をもってキリスト教の教えを考え直そうとするということにあると言えます。せっかく仏教との接触に恵まれたものとして、そういう事に自分のキリスト者としての摂理的課題・使命があるという自覚も、彼らの論文から強く出てきます。この営みによって得ようとするものには二側面を区別することが出来るでしょう。一つは、キリスト教の教えを、その本質により密接に則した形で表現すること、もう一つは、キリスト教の普遍性——つまりキリスト教がただ西洋的なものばかり

りではなく、同時に東洋にふさわしいということを露にするという願望です。前者は有賀鉄太郎先生の著書に特に明らかに伺えますが、後者は武藤一雄先生によって例えば次のように表現されました。

従来のキリスト教が、世界宗教という性格をもつにしても、あまりに、西洋的な世界宗教という性格を具えていたと思われるから、〔省略〕真にエキュメニカル宗教となる（ために）、東洋的（あるいは日本的）な世界宗教ともなりうる道を求めるものでなければならぬと思う。²

さて、海外、特に西洋では、伝統的・ギリシア的神学に対する不満や批判が一番強く聞こえる領域は、次の四つではないかと思われます。

1. 組織神学の、聖書の考え方からの隔たりを度々指摘してきた、いわゆる聖書神学、
2. もう少し直接に世界の現状から神学しようとする解放の神学、
3. ハイデッガー、デリダなどによる、伝統的形而上学を脱構築（deconstruct）しようとする哲学的運動に影響された神学的傾向（postmodern theology）、
4. 伝統的神学の範疇をもって、キリスト教と他宗教との関係は考えられないと嘆く諸宗教の神学ではないでしょうか。

そういう領域で聞こえる批判が、伝統的神学のどの点に当たるかということをここで調べる事が出来れば、日本における「仏教的」神学の傾向の世界的位置を考えるのに、大変有益ではないかと思いま

すが、時間（そして資格）がないので、それを割愛させていただきます。

この神学に関する二三の観点

次に、なるべく討論の種になるように、仏教に学んで神学するという営みを少し別の観点から見ることにしましょう。

まず、日本におけるこの神学的運動のコンテクストと言えましょうか、国際的環境の中の位置に関して少し質問したいと思います。先程、脱構造の神学に軽く触れましたけれども、それと日本におけるこの神学との関係はどうなっているのでしょうか。両者の間に、問題にするところが大分共通で、思想の方向性もよく似ている感じはしますが、その二つの運動の間にすでに何か連絡とか相互の影響があるのでしょうか。そして、伝統的神学に対する批判として、「仏教的」批判にはpostmodern な批判よりも徹底的なところがあると言えるのでしょうか。また、他の仏教国（韓国、台湾など）において、似ている動きが見られるのでしょうか。さらに、御存じの通り、インドでは、Le Saux, Monchanin, Bede Griffiths などが代表するような、インドの advaita 思想に影響されたキリスト教的運動が見られていますが、それとの関係や連絡はどうなっているのでしょうか。

次に、この神学における仏教（とりあえず空の論理）からの影響はどういうものなのでしょうか。それを詳しく「定義」することが出来るのでしょうか。例えば、その役割はただ否定的、批判的、deconstructive なもの（いわば、偶像を

つぶす働き）でしょうか、それともその役割は同時に積極的、constructive とも言えるでしょうか。御承知のように、部派仏教のAbhidharma に対する龍樹の空の働きが純粹に否定的なものだったとよく言われるでしょう。

もう一つ、今回の営みが、「仏教の影響のもとに神学すること」と言っていると思いますが、その時に「仏教」と言われるものが、仏教の特定の一つであるということを経験した方がいいと思われます。つまり、おおざっぱに言えば、それは「大乘の中に仏性に重点を置く仏教、または、空をすべての根本原理にする大乘仏教」と言えるのではないのでしょうか。それは、多様な仏教の中の非常に立派な発展とは思われるけれども、決して仏教全体ではないでしょう。

しかも、仏教の影響がキリスト教徒の神学者たちに直接に及んだと言うよりは、間接的に、すなわち京都学派の哲学が媒介になって及んだということも見逃してはならないと思います。京都哲学の思想的方向は、例の仏教に非常に忠実で近いものと思われますけれども、両者が同じ問題、すなわち日常生活、とりあえず社会的実践への転換の困難さを共有するところまでと言えるかもしれません。しかし、一方が宗教であり、他方が哲学であるという違いは残ります。哲学は、哲学であるだけで、宗教的「道」を真に考慮することは出来ないし、宗教的真理に含まれている神秘を尊敬できなくて、それをいわば世俗化して、つまり普遍化・論理化してやまないのでしょうか。私はおもにヘーゲルを実例として考えてい

ますけれども、今問題になっていることに則して言えば、ギリシア哲学の神の脱構造を大いに賞賛したいが、その代わりに東洋哲学的神に到達したくはないのです。この点では、一度武藤先生の警告の言葉に耳を傾けたらいいとも思われます。すなわち、

西田先生の哲学とそのキリスト教観は、
〔省略〕そこには伝統的な神学的地平を
越えて新しく開眼せしめられるものがある
と同時に、失うべからざるものを見失
う危険性も潜んでいるように思われる。³

最後の点になりますが、仏教的思想が主として神学のどの項目か領域に貢献できるかという問を出したいと思います。例の神学の今までの成績からしますと、神の存在と本質（おそらく三位一体をも入れて）、または神と人間との関係——キリスト教の教えの中心的と同時にもっとも形而上学的なところ——に関しては、仏教の貢献の可能性が非常に大きいとの感じはします。他方、教会論とか、受肉の延長線に見られた秘跡のことにしますと、仏教の思想にあまり期待できないと一応思われます。しかし、例えば倫理神学に関してはどうでしょうか。仏教におけるような、善・悪の二元論を越える立場は、キリスト教の倫理思想の有益な一面になり得るのでしょうか。それはともかくとして、例の神学においては、倫理的側面が十分に考察されていないのではないのでしょうか。

すでに収穫があるのか

最後に、もう一つの質問を出したいと

思います。このシンポジウムにおいて私達は、仏教に学んだ神学（の成果）をまとめて省みようとするようになりますが、今という時点においてその営みの諸文献の中に、「収穫」と言えるものが含まれているのでしょうか。すなわち、例の思想家がそろって主張して、私達もみな同意すべき命題を見極めることが出来るのでしょうか。

もしそういうものがあるとすれば、それはこのシンポジウムの議論によって判明されるはずですが、多少の叩き台になるように、自分なりに「そうではないか」と思ったものを二三、批判しやすい公式化の形で、挙げたいと思います。

1. 霊的事実（西田幾多郎が「心霊上の事実」と呼んだもの）を理解・表現・整理するに当たって、ギリシア的論理より、仏教的論理の方が適切である。

2. 宗教的思想や実践になると、仏教における縁起説（*pratītya-samutpāda*）というものは極めて重要な考え方である。ただし、空と同一視された縁起、すなわち万物の自性（*self-being*）を完全に無化する相互関係性という考え方は、「他」（他性、*alterity*）が大きな役割を果たすキリスト教には、そのままに取り入れられないのである。（従って、「無即愛」という公式は誤解を招くものである。）

3. 仏教の思想がキリスト教神学に対して最も有益な働きを持ちうるのは、従来の神学においてあまりに二元論的に考えられてきた事柄の相互依存を明らかにするところにある。例えば、信（信仰）

と覚（知恵）、神を知ることと自己を知ること、宗教における客観と主観というようなことを考える場合。それに関して、武藤先生のもう一つの言葉が思い出されます。

私どもが神学的思惟において、解き難いアポリアに達着するとき、その解決のために、西田哲学から貴重な示唆を与えられることが少なくないことを告白しておきたいと思う。⁴

4. キリスト教の「教」と「行」は、その構造や内容において、ギリシア的「有」の哲学によって理論・説明できる以上、深い否定性を含んでいる。元シカゴ大学の神学部教授Langdon Gilkeyはそれを次のように表現しました。

一方もっぱら神の有を主張しながら、他方神の子の死にその中心を持つ教理は、多少矛盾しているのではないか。⁵

5. 神の本質を考えるとときに、「有」という範疇のみでは不十分で、同時に「無」という範疇にも積極的な役割を与えなければならない。ただし、同じく、神のことは「無」だけからも考えられない（それを「絶対無」と名付けても）。

6. 以上です。この短い話しはこれからの議論に対して、少しでもヒントになれば幸いと存じます。

註

1. 本多正昭、「仏教の“即”の論理とキリスト教」、『宗教哲学論集』。私家版、1974年、p. 2。
2. 武藤一雄、「信仰の神と哲学の神」、『神学的・宗教哲学的論集I』,東京：創文社、1980年、p. 45。
3. 武藤一雄、『キエルケゴール』、西宮：国際日本研究所、1967年、p. 346。
4. 武藤一雄、同、p. 347。
7. Langdon Gilkey, in: *Buddhist-Christian Studies*, 5 (1985), p. 77.

ヤン・ヴァン ブラフト
南山宗教文化研究所前所長